

『社会科教育』一九五〇年三月（社会科教育研究社）

教育評価の意義と動向

矢口 新

教育評価という概念は、教育期の変革に伴って起った所の新しい概念である。それは一体われわれの教育実践の中で如何なる位置にある活動であろうか。

まず教育実践の具体相を頭に思い浮かべながら考察していこう。ここに一人の少年を短距離レースのランナーに育てようという目的をもったトレーナーがいるとする。この場合もちろん少年もそういう意図をもっているとする。所でトレーナーは理想的な短距離ランナーというものが、どの程度の走力、体力或はフォームを持つべきかということをよく知っているであろう。例えば百米十秒三の走者はかくかくの条件を備えている、脚の運び方はかくの如きが理想的であり、手の振り方はこれ等ということである。こういう理想的な姿については、彼は経験上自ら所有していることもあるし、また特にこういう点は如何にあるべきかという様にして研究したこともある。そうして今後彼が一人の少年を指導していく過程に於ても益々詳細に調べられるであろう。

ともかく現在の彼は彼なりの理想像を描いているのである。それは結局彼のそれ迄の経験がつくりあげていると言えよう。併しそれは別な観点から見れば社会がそれ迄に積み上げた経験とも言えよう。或は社会の歴史の所産といってもよいかも知れない。そういうものを土台にして彼の理想も成立しているのである。こういう一般的理想がなけ

れば、彼は少年を指導しようという気持を起さないであろう。そういう意味で一般的な理想というものは教育活動を起させる原動力となるものである。

所でトレーナーはどのようにして少年に対するトレーニングを開始するであろうか。百米十秒三の走者がこの場合理想として考えられていてもそれだけでは、現前の教育対象に如何なる指導をするかということとはきめられないのである。完成された人とこれから指導される少年との間にはギャップがありすぎるのである。そこでトレーナーはまず少年の現在の能力がどれだけであるか、彼のランニングのフォームはどういうものであるか等を充分深く知ろうとするであろう。そういう点について出来るだけ詳細に知れば知る程彼は少年に対する指導を適切ならしめことが出来るであろう。

所でこの場合少年をかれが観察したり測定する観点は、何所から与えられるのであろうか。少年を見るといつても、見る点は様々ある筈である。その中でトレーナーが例えば手の振り方、脚の運び方、姿勢等について見るとしたら、その点を見る根拠は何であろうか。それは実に彼の描いている理想がきめて来るのである。前述の如く彼は理想像を描いて、それを様々な観点から把えているわけである。即ち前に述べた手の振り方とか、脚の運び方とか等々である。その理想像を構成する要点となるものが、少年を見る観点となるのである。

少年がこういう観点から見られることによって、トレーナーは彼の理想像としたものと少年との間のギャップを明らかにする。この観察と測定等を通じて、そこにトレーナーは少年が完成されたランナーとしてのどういう姿のものとなるかという少年に即した具体的な理想像を描き、且つそれに到達する過程に於てどういう点に対する指導がどう行われなければならないかを把握して来るのである。

こうして少年に対する数年間のトレーニングのプランも考えられ、更にそのカリキュラムの中で現在何をなすべきかも定まる。

さてトレーニングが実際に開始されるとどうであろうか。少年は自己の最後の理想のフォームを常に鑑(かがみ)として自己を訓練するであろう。少年は自己の能力や体力に依じて最善のフォームをそこに実現してゆく。それは言い換えれば、少年の現段階に於ける理想像を実現して居ることである。これが積み上げられて、体力、能力も次第に伸長して数年後に次第に究極的な理想像へと接近してゆくのである。

併しこの間に於てトレーナーは始終少年を観察、測定しつづけるであろう。トレーニングの進み行きと共に少年は次第にそのフォームを改めて行くであろう。それは或る場合はトレーナーの予想した通りであるかも知れない。また或る場合はトレーナーの予期に反した結果を現すかも知れない。例えば余りに或る一ヶ所の矯正を強調しすぎて他の欠点が生じたということもあろう。或は何かの指導が誤つて居たために全体のフォームが崩れてしまったという事があるかも知れない。こういう事情を常に不断に見ていて、次々と指導を改め、修正し、或は新たな方式を生み出して行かねばならないのである。

この場合も少年を見る見方は前述した所と何等かわりがない。全く同じ形式で考えられる。やはり彼の理想像を構成する要点が観点となつて見られて行くのである。ただ異なる所は少年が指導に従つて訓練をして伸びているという事である。いわば少年は己れのもつ能力を深く掘り下げてそこに自己を表現しようとしているのである。トレーナーはこの新に表現された少年の内部の力を見るのである。それにトレーナーは今まで見られなかった少年を発見し、理解する。そうして更に新たな指導方式を生み出すのである。同時にトレーナーが抱く少年の完成された暁に於けるフォームというものも、その以前に彼の描いたものとは異つて、より少年に即したものになるであろう。それだけ少年に近づいたわけである。

こうした形式で繰り返しが行われて行く間に少年の指導は具体的に進展するであろう。

以上の例から指導が行われるためには二つの重要な要素がある事が分る。一つは即ち具体的な教育理想乃至到達目標が常に基礎として必要であること。所がそれが成立つためには一方に於て教育対象の現実の姿が明らかにされなくてはならぬこと、この二つである。そうして而もこの両者は別箇な要件ではなく、実は力動的な関係をもった離るべからざる要件である。即ち具体的な到達目標、理想像は常に教育対象の現実によつて具体的に把握されるのである。対象の現実が明らかになればなる程到達目標もより具体化され、現実化されるのである。即ち理想が具現される方へ近づいて来るのである。或は現実に於て理想が把握されるのである。所が一方教育対象の現実を明らかにするには、まず到達目標が明らかにされていなければならないのである。対象を見る観点は常に理想像が規定しているのである。即ち対象が現にどこまで到達しているかを見るには、それを見る観点として一応到達すべき目標が明らかされていなくてはならないのである。

教育とか指導とかいう活動は、現実を理想へ近づけるためにあるといわれるけれども、この場合現実とはばらばらにあるものでなく、両者が一直線上に並んだ時にはじめて指導という活動が起るのである。それは現実が理想によつて見られ、理想が現実に於いて見られたときに起るといえよう。

ここで我々は新しい概念である教育評価の根本問題にふれる事が出来るであろう。是迄われわれは教育とか指導とかをどうして成立せしめて来たであろうか。前述した如く具体的理想によつて対象を見、対象を見ることによつて対象の中に理想をつかみ、そこから教育なり指導なりの具体的な実践を成立せしめて来たであろうか。

曾つて我々は真に人間を育てる教育を考えず、専ら知識を注入する教育を行つてきた。その教育では、人間は恰も知識を盛る器の如く取扱われていたのではなからうか。そこでは教育対象に即して理想が考えられ、対象が理解されて指導がなされたのではなかつた。まず一定

標準の知識の量がある。これを受け入れることは至上の命令であったのである。教育対象は有無を言わずそれを受け入れさせられたのである。問題になることがどれだけ受け入れられたかである。恰も器に水がどれだけ入ったかが測られるようにそれが測られたのである。併し測られた結果はどうなったであろうか。それは生徒の成績として、生徒自身の評価となったのである。そこから指導の問題点などが考察されたのではないのである。指導にはむしろ無条件の権威が認められていたというべきであろう。

かくの如き教育は真に人間を育てようとする教育でない。そこには最初からヒューマニズムを欠いているのである。若し真にヒューマニスティックなものがあるならば、まず人間を理解すること、教育対象を理解すること、そこからその人間の理想を生み出して指導すること、そして如何に指導がなされたらその人間が育つかという事が考えられるべきであろう。今われわれはその点について大きな努力をしようとしているのである。

教育評価がやかましく言われるのはまさにこの点を問題にしていることなのである。我々が従来殆んど等閑視していたこの点に合理的な思考と実践の手をのぼそうとする事に他ならぬのである。教育評価とは、教育対象の現実に適応した指導を行うために、対象の現実を常に把握し、それによって指導を反省し、検討しようとする営みを言うのである。タイラーが『新教育に於ける評価の位置』という論文に於て、評価とは指導計画を検討することであり、指導計画がよつてもつて立てられた基本原理が正当であつたかどうかを検討することであり、指導のための基礎となる個人の現実を明らかにする材料をあつめることであるというのはこの点から見て正しいと言わなくてはならぬ。(R. Tyler: The Place of Evaluation Modern Education Elementary School Journal 51, 1940)

さてこれらのことから考えて、現在一般に考えられている教育評価

は果して妥当であろうか。そこには何か旧教育的な雰囲気がつきまわつていないであろうか、依然として生徒の評価にとどまっている。生徒の順位を決定したり、段階をつけたりすることにとどまっていはいないか。評価さるべきはむしろ教育の方式であり、教師の指導であり、学習活動のあり方であつて、生徒の能力理解力、技術、態度というものではない。それは評価さるべきものでなく、生徒の全人間を理解する材料であるにすぎない。前にも述べた如く教師は様々な観点から生徒のあり方を見るのである、生徒の表現するものを通じて生徒を理解するのである。そこに指導や学習活動の現実形態が批判検討されるのである。

以上の如く考えると現在行われている評価は必ずしも正しいあり方にならないように思われるのである。例えばスタンダードを定めて検査する事などが評価の中心であるかの如くに考えられているのはその一例である。スタンダードによつて、その生徒の位置を標準の中に位置づけて見てもその生徒に対す指導が具体的に如何にあるべきかは一向明らかにならないのである。それは次のような例を考えると明らかであろう、前に述べた短距離ランナーのトレーナーが、今年年の百米のレースのタイムを取るとする。それは十二秒とか十二秒三とか出るであろう。そしてそれを全体のランナーの順位の中へ位置づけたとする。それは少年に或は励みを起させることになるかも知れない。ただそれだけである。これから何等トレーナーがその少年をどう指導するかは出て来ない。ただ漠然ともっと早くならぬといけないと考えるだけである。トレーナーが真に少年に対して指導を与えるつもりならば、そういうタイムの如き符号ではなく、具体的に、手や脚の動かし方がどうであり、上体の姿勢がどうであるかが見られるべきなのである。それらの要素が総合されてタイムという結果となつたので、それは指導の問題ではないのである。

この様に真に教育対象の指導を考えて、対象が見られる場合と、た

だ順序や序列をつけるために見られる場合とは全く見る事柄が異って来るのである。現在、評価、評価といわれているけれども果して生徒の何がどのような意図で見られているかについては、充分検討を要するのである。

以上評価といわれる活動が教育実践の中で如何なる位置を占めているかについて考察したのである。現在は評価という活動の心理学的研究が盛であり、その技術的研究は進められているけれども、肝心の意義について十分な認識がなされていないようである。

評価という概念によって、我々が問題にしている所は、教育の実践をより現実の基礎の上に成立せしめようとするための科学的な探求と実践なのである。それは人間を育てようとする教育本来の姿に基いて考えられているのである。教育対象たる人間を理解し、そこからその人間を育てる手段を生み出そうという、すぐれてヒューマニスティックな実践なのである。この意図が見失われるならば、それは形骸のみとなってしまうことを忘れてはならない。

かくの如く考えると、教育評価という概念をただ生徒の教育効果判定という一つの技術的領域の仕事と考えるのは誤っていることが明らかであろう。むしろ教育活動の全面に亘って常に行われているわれわれの反省的な思考というべきである。われわれは教育理想をいだし、それによって現実の教育対象にぶつかり、そこに於て理想を実現せんとして様々な教育活動を営む、現実はずしも我々の理想通りではない。否むしろ現実は無限に堀り起こさねばならないのである。我々の理想を抱いた実践は、常にこの現実の進展という見地から批判されるのである。無限に現実を迫り行き、そこに新たな理想を実現しようとするのである。無限に現実を掘り起し、そこに我々の実践を反省しそこから新たな現実を創造しようとするのである。この営みそのものが教育評価と言わなければならない。教育評価とは我々の教育実践に対する反省なのである。それは実践に伴う他の一面とも言えよう。実践を

裏づける反面とも言えよう。

従って評価という活動はわれわれの教育実践の企画に於てなすべき事である。学校活動の全面が、否、教育活動の企画が常に評価されていなくてはならない。Evaluationという言葉は本来、Evaluation of School activity として用いられて来たのである。教育活動全体の評価が、考えられているのである。教育政策の、教育施設の、すべての評価が考えられねばならぬのである。

かくの如き評価が強く考えられて来たという事にわれわれは最近の教育の動向を強く認識しなければならぬ。教育が上からのものであると考えられ、或は一定形式の教育活動が無条件に權威をもって、それが何等批判の対象にならなかつた過去の教育はやはり一つの封建的教育であつたという他はない。そういう実践が現実によって批判されねばならぬとする所に新しい教育の意欲があるのである。現実とは結局大衆の現実であり、人間的現実なのである。そこから教育実践が批判されて来るといふことはこの大衆の現実の上に、それを基盤とした自立的な教育を打ち樹てようとするのでなくてはならない。

そういう教育運動として教育評価の問題をとらえるなら、我々はまた新しい視野を得るのである。アメリカに於てかくかくの方式で評価が行われている等という無批判な受け入れ方は、そもそも教育評価の理念にあわないのである。我々が自らの教育目的をもち、自らの現実に於てそれを実現する営みの中に評価が真に成立するのである。我々は現在行われている全教育活動を、我々自らの現実によって評価すべきであろう。教育評価の任務はそこにあるといわなければならない。

(中央教育研究所所員)